

# 「Z-GIS」を活用した 加工・業務用はくさいの効率的な出荷管理

全農の営農管理システム「Z-GIS」は、さらなる利便性向上を目的に、毎年、その機能を強化しています。今号では、三重県JA鈴鹿での取り組みを紹介します。

## 出荷管理における問題

三重県の中北部に位置するJA鈴鹿では、2013年に加工白菜部会を設立し、加工・業務用はくさいの生産を始めました。現在、部会には農家20名が所属し、合計8.7haで「結福」や「飛躍」など4品種を栽培しています。茶・植木農家の複合経営品目のひとつとして栽培する農家が多く、はくさいは鉄コンテナを中心とした出荷が行われています。

部会設立当初、JAも生産者も「つくれば売れる」の考え方のもと、産地拡大を図ってきましたが、2018年頃からは販売状況とは関係なく、収穫したはくさいを生産者が次々と倉庫へ運び込んでくるようになり、その結果、はくさいが倉庫で滞留し品質の低下を招くことになりました。また、生産者同士で鉄コンテナの取り合いとなり、生産者によっては適期に出荷したくてもできないというケースもありました。

## 押し込み型の生産体制からの脱却

こうした出荷管理の問題に直面した部会では、在庫が滞留しない仕組みづくりや、品質を第一とした定時定量出荷が必要と考え、生産・販売状況の“見える化”に着手しました。

生産状況の“見える化”では、「Z-GIS」で品種や株数、1玉当たりの予測重量を入力することで、出荷の進捗に合わせた圃場の在庫量予測に活用しました。また、生産者がどこの圃場から出荷したかわかるよう、鉄コンテナに圃場番号を記入し、「Z-GIS」で適宜出荷量を管理しながら圃場在庫量を予測し、進捗に合わせた生産状況の見える化を図りました（写真1）。

これまででは、出荷時期を予測するために、現地確認や聞き取り調査を繰り返し実施していましたが、「Z-GIS」によりデータをクラウドで管理でき、スマートフォンからでも圃場の在庫量を確認できるため、労力軽減やスムーズな出荷につながりました（図1）。また、「Z-GIS」のナビ機能を使って、効率的な現場確認

やタイムリーな営農指導が実現できました。

一方、販売状況の“見える化”では、「出荷指示計画書」を作成し、はくさいを出荷できるタイミングが明確となり、生産者は計画的な営農が可能となりました。また、先々の販売動向が予測できるようになったことで、「Z-GIS」による圃場の在庫量と照らし合わせて販売の追加の有無が見えるようになり、全体を通してスムーズな出荷の流れを構築することができました。

このように、2018年以降は、押し込み型の生産体制から脱却し、必要数を重視した「滞留をなくす仕組みづくり」に取り組むことで、品質第一の出荷が可能となり、販売先からの信頼獲得や取扱量の増加につながっています。

【全農 耕種総合対策部 スマート農業推進課】



写真1 鉄コンテナに圃場番号を記入して数量を管理

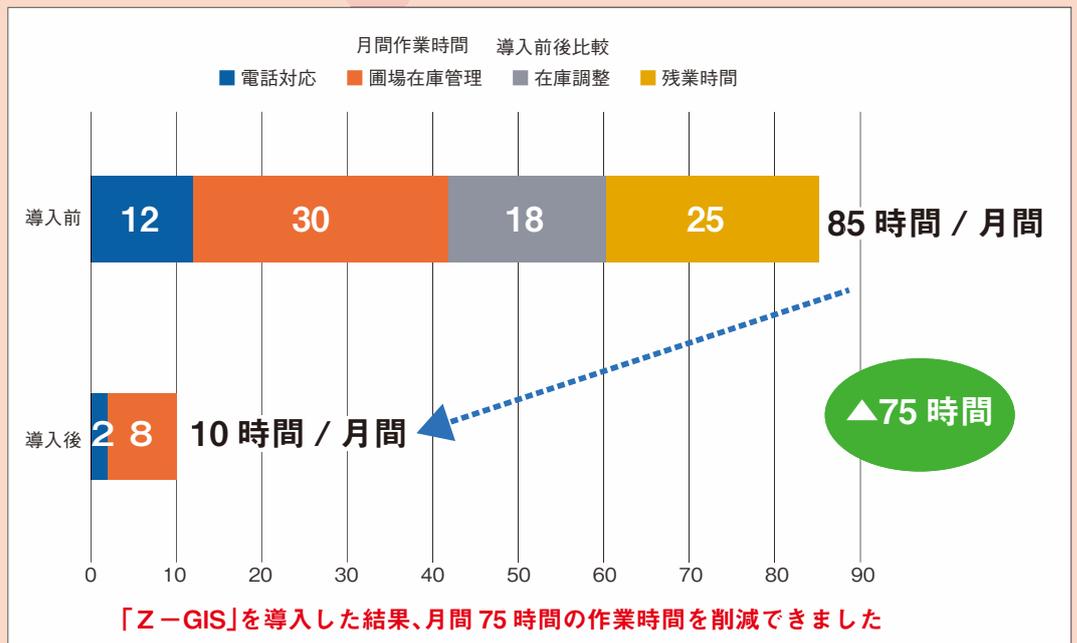


図1 JA営農指導員の作業時間削減効果